

# 報 告 書

中医学教育臨床支援センター長

兵頭明

件 名	第 68 回全日本鍼灸学会学術大会 愛知大会シンポジウム 5 に参加して
報 告	<p>第 68 回（公社）全日本鍼灸学会愛知大会において下記のシンポジウム 5 のシンポジストとして発表して参りましたのでご報告させていただきます。</p> <p>日時：2019 年 5 月 12 日（日）14：30～16：00 会場：名古屋国際会議場サブホール 4 号館 1 階 白鳥南 シンポジウム 5 テーマ： かけがえのない記憶の再興戦略 ～鍼灸の挑戦～ 座長：北村 伸（成仁会 長田病院 脳神経内科 部長） 演者：本田美和子（東京医療センター 総合内科医長）           テーマ：優しさを伝えるケア技術（ユマニチュード）           兵頭 明（後藤学園中医学教育臨床支援センター センター長）           テーマ：認知症の人に対する鍼灸治療の取り組み成果と今後の可能性について</p> <p>【本田先生の講演内容】（30 分） ユマニチュードの基本理念とケア技術の紹介 ・ユマニチュードはフランスで生まれた知覚・感情・言語によるマルチモーダルケア技法。「あなたは大切な存在です」というメッセージを、ケアを受ける人が理解できる形で届けるための方法である。 ・この技法は、「見る」「話す」「触れる」「立つ」というケアの要素（4 つの柱）を徹底して複数同時に行う。 ・ユマニチュード導入による効果の紹介 ① 認知症の行動心理症状やケアの拒否が減少し、看護師、介護福祉士、家族の介護負担が軽減 ② 医療専門職種の職務に関する満足度の増加による離職率の低下 ③ せん妄発症率や身体抑制の減少 ・現在の取り組み紹介 ① 映像を用いたケアの分析に AI を導入するなど、ケアの質に関する情報学の専門家との研究状況について、動画を用いて紹介された。</p> <p>【兵頭の講演内容】（30 分） ・本プロジェクトの取り組みのきっかけ、取り組み方、取り組み内容、取り組み成果、課題、今後の可能性について添付スライド資料を用いて紹介した。 ・取り組み内容については、医療・介護・鍼灸 3 分野の学習内容を紹介、とりわけ認知症者に対する接遇法、鍼灸治療のための手技の標準化（客観的評価）の重要性について紹介した。 ・取り組み成果については下記の内容を紹介した。 ① Gold-QPD 修了者による 56 症例（AD、VaD、L-SD）の MMSE、N-ADL の症例報告分析について紹介した。 ② 文科省委託事業で、Gold-QPD 修了者に対して行ったアンケート調査に基づいて制作した「認知症の人に対する鍼灸施術サポートガイド（抜粋）」について紹介した。 ・課題については、Gold-QPD 育成講座では認知症者への接遇法として、14 のバリデーション技法については学習しているが、ユマニチュードのような認知症者に対する接遇法の客観的評価システムがないため、認知症者に対する対応の仕方、能力にはばらつきがある。</p>

**【ディスカッション】(20分)**

- ① 認知症者への鍼灸施術の前提は、ラポールの形成。いくら知識と技術があっても、それがないと施術というスタート点に立てない（認知症者は施術をさせてくれない。）
- ② ラポールの形成のためには、認知症者に対する対応の仕方の標準化および対応の仕方の評価、フィードバックのシステムができているユマニチュードは、鍼灸師ならびに鍼灸学校の教育への導入が望ましい。
- ③ 全国の少なからざる鍼灸マッサージ師は認知症者に対して施術を行っているはずだが、認知症および認知症者に対する治療の考え方がバラバラであり、説明の仕方および施術も十人十色の状態である。またほとんど症例報告もされていないので、その実態はほとんど知られていないというところに問題があると思われる。
- ④ 上記③の問題点はどこから発しているかということ、恐らく鍼灸学校での教育状況が考えられるのではないか。
- ⑤ 今後の3年、5年、10年、20年後の日本の認知症者の増加推移を鑑みると、鍼灸マッサージ師という医療専門職種だからこその強みを見出し発揮することが、大きな社会的貢献に繋がることでしょう。
- ⑥ 現在、すべての医療専門職種の中で、あるいはその教育カリキュラムの中でユマニチュードの導入にはバラツキがある。鍼灸教育界全体としてユマニチュードが導入されれば、非常に先駆的な取り組みとなるのではないか。
- ⑦ 北村先生は認知症専門医、本田先生は総合内科医長で高齢者ケア研究室室長でもある。鍼灸師だけで認知症者に対するエビデンス研究を行うにはかなり困難が伴う。東西医学融合、予防医学という観点で、先生方とまず軽度認知障害(MCI)に対する共同研究ができれば良いと思われる。

**【まとめ】**

北村先生は老人病研究会常務理事で、Gold-QPD 育成講座の生みの親の一人でもある。本田先生は日本中医学会で私と一緒にシンポジストになったこともあり、医道の日本 2017年10月号では、私がユマニチュードについて本田先生にインタビューということでインタビューをさせていただいた経緯がある。そのため両先生とも鍼灸に対して一定の理解をお持ちであった。その上で今後の高齢者対策、認知症者対策における鍼灸師の役割と可能性については、とても期待されており、上記の①～⑦のディスカッションも考え方を共有することができたようである。今後の新たな連携が期待される。